

## 精を吸う蟲と同性の山

厳冬。山は猛吹雪に覆われ、銀古は険しい山道を苦勞しながら進んでいた。刺すような寒風が容赦なく襟元から入り込み、耳の付け根、鼻先、頬を真っ赤に凍らせていた。いつからか体が震え始め、吐く息は白く、鼻先に水滴となって凝結し、拭いてもすぐにまた凍りつく……

「こんなに寒い天気は久しぶりだな……とても寒い。鼻先が痛み始めてきたし、体も……このまま誰にも会えなかったら、まずいことになるかもしれない。」

銀古は独り言を呟きながら、膝まで積もった雪の中を進み続けた。

……

どれほどの時間が経っただろうか。銀古は体が温かなものに包まれ、呼吸が楽になり、痛みも消えていることに気づいた。意識が徐々にはっきりすると、聴覚と嗅覚も戻ってきた。柴の燃えるパチパチという音が聞こえ、食べ物の香りが鼻をくすぐる。銀古ははっと目を開け、自分が柔らかな綿布団の中に横たわっていることを知った。視線を上げると、そこは見知らぬ光景だった……

「あ、目が覚めたか？」

銀古が戸を開けると、二人の男と小さな男の子が囲炉裏の周りに座っていた。

吊り鍋の中では野菜と獣肉がぐつぐつと煮えている。

「う……ん、私、どうしてここに……？」

「ああ、風が少し弱まったときに、外へ出てみようと思って。運が良ければ野ウサギでも獲れるかな、と。そしたら雪の中に倒れている君を見つけたんだ。冬の獣肉は貴重だからな。今日はウサギと山菜の鍋だ。ちょうど夕飯が出来上がったところで、起こそうか迷っていたところだ。よく起きてくれたな。こんなに長く寝てたんだから、腹ペコだろう？ さあ、こっちへ来て一緒に食べよう。」

銀古は思わず唾を飲み込み、腹がぐうぐうと鳴った。「……うん。」銀古は頷き、囲炉裏のそばに座った。男が差し出した飯と、ウサギ肉と野菜がたっぷり入った濃い汁の椀を受け取る。「ありがとう。でも、こんなにたくさんもらっていいんですか？」

「構わないよ。冬を越す食料は十分に蓄えてある。獣肉はただの自然からの贈り物さ。鍋にはまだまだあるから、遠慮せずにたくさん食べな。体が温まるぞ。」男は鍋をかき混ぜ、一杯を銀古に見せた後、隣の男と子どもの椀にも盛った。

「あ、そうだ。まだ自己紹介してなかったな。私は川猿平治。彼は私の夫の川猿孝忠。この子は俺たちの子だ……君の名前は？ 兄ちゃんに教えてくれよ。」

「私は川猿……良吉。今年、四歳。」

「上手だな～。孝忠パパのそばに座ってご飯食べよう。」

「うん。」良吉は孝忠の隣に座り、銀古を見上げて尋ねた。「お兄ちゃん、名前は？」

「あ……」銀古はこの光景に一瞬言葉を失い、しばらくして答えた。「私は銀古だ。」

「銀古さん、蟲師さんですか？」

「うん、どうして分かった？」銀古は木の椀を持ち、汁を一口啜った。「うまい……体中が温かくなってきた。」

「蟲師って、山口さんみたいな人？」良吉は首を傾げて聞いた。

「うん、そうだよ。」孝忠は優しく良吉の頭を撫でた。

「ああ、この山には君と似た装いの人が住んでいるんだ。昔、山にやってきて、自分を蟲師だと言っていた。実際、彼はいろいろな難病を治してくれたよ。良

吉が幼い頃、高熱で苦しんでいたときも、山口さんが治してくれた……ただ、彼が言う『蟲』というものは、俺たちには一度も見えなかった。だから俺たちにとっては、山口さんはただ医術の優れた普通の医者だと思っているだけさ。」

「なるほど。そういうことか。似た装い、というのはこの背負っている箱のことか？」

「うん、そう。」

「その山口さんという方は、この山のどこに住んでいるんですか？ ぜひ会いして話を伺いたいのですが。」

……

「二人の男が家庭を築き、しかも自分の子まで……その子は、どうやってできたんだ？ 直接聞くのは失礼かもしれない……これも蟲の影響なのか？ もしそうなら、こんなタイプの蟲は初めてだ。きっと彼らの言う山口さんにしか、この謎は解けないだろう。」銀古はそう考えた。

……

「山口先生なら、西側の山麓に住んでいるよ。うん……ただ、今もまだ大雪が降り続けているから、今出かけるのは危険すぎる。数日待つて雪が止んだら、俺が案内してあげるよ。」

「それは本当に助かります。」

……

子どもは子どもだ。良吉は腹いっぱい食べるとすぐに眠くなり、孝忠が寝室へ連れて行き、布団を整えてやった……

銀古は椀の最後のひと粒まで平らげ、片付けを手伝おうとした。

ちょうどそのとき、孝忠が奥の部屋から出てきて、銀古の手から食器を受け取った。「病人なんだから休んでいてくれ。体がまだ本調子じゃないだろう？ こんな雑事は俺に任せておけ。」

「そんな、申し訳ないですよ。命を救ってもらって、食事まで分けてもらって……どうお礼を言えればいいか分からないくらいです。せめて皿洗いくらいは手伝わせてください。」

「銀古がそう言うなら、一緒にやろう。そっちの方が早く終わるし。」平治が言った。

「うん。」

.....

「ところで、銀古さんはどうしてこの山に来たんだ？」

三人は木の洗い桶の前に座り、温かい湯の中で食器を洗いながら、雑談を交わしていた。

「ああ、私は蟲師で、同時に旅人でもある。どこかに長く留まることはあまりないんだ。」

「なるほど。つまり、ここに来たのは完全に偶然だったわけだ。」

「まあ、そういうことになるかな。」

「.....さっき食事のとき、銀古さんが少し躊躇していたように見えたけど.....

まあ無理もない。ここは他の場所とは違うからな。普通の家庭は男女で成り立っているものだ。」

川猿平治の言葉に、銀古は一瞬固まった。まさか本人がこんな直接的に核心を突いてくるとは思っていなかった。

「.....うん、確かにその通りだ。」銀古は少し気まずそうに笑った。

「ちょっと、平治、そんなストレートに言うなよ。銀古さんが困るだろう。」

「でも、状況が分からないままだと、俺だったら一晩中眠れなくなると思うぞ。」

「それなら……いくつか質問してもいいですか？」

「うん、俺が知っていることなら何でも。」

「良吉、あの子は……あなたたち二人が産んだ子なんですか？」

「やっぱり銀古さんが一番気になっていたのはそこか。」

「もし失礼な質問だったら、本当に申し訳ありません。答えにくいことなら、無理に答えなくても大丈夫です。」

「構わないよ。良吉は確かに俺たち二人の子だ。正確に言うと、孝忠が産んだ。俺はただ、種を孝忠の中に残しただけだ。」

「ちょ、ちょっと、最後の言葉は余計だろ！」川猿孝忠は顔を真っ赤にして叫び、腕を伸ばして指を弾き、手についた水滴を平治の顔に飛ばした。

「はははっ、ご、ごめん孝忠、悪かった、止めてくれ！」平治は腕で顔を庇いながら笑った。



銀古はただ俯いて手元の食器を洗い続け、頬が少し熱くなるのを感じていた。

「まあ、詳しい仕組みは俺もよく分からないんだけど……山口先生が昔言っていたのは、確かある種の蟲のせいだということだった。その蟲が男の体に取り憑くと、取り憑かれた者が妊娠可能な体質になるらしい。ただ、大抵の場合は妊娠しない。でも、もし俺の記憶が正しければ、山口先生はこうも言っていた——山主の寿命が尽きかけるときにだけ、蟲に取り憑かれた男が子を宿す現象が起きる。そして、新しい山主はその妊娠した男たちの誰かの腹の中から生まれる、と。」

「何……？ 山主……山主って、この山の山主がそんなふう世代交代していくのか？ でも普通、山主って人間の姿じゃない存在のはずだ。つまり、山主は普通なら山の動物のはずなのに……この山の山主が人間だなんて？ いや、それでも人間とは言えないだろうけど。」

「やはり山口先生に会って話を聞くしかないな。俺たちには蟲師の言う『蟲』が見えないから、それ以上深く理解するのは無理だ。たとえ蟲師から説明されても、実体が見えない以上、対処のしようもないだろうし。」



「そうですね、平治さんの言う通りです。それでも、質問に答えてくださって  
ありがとうございます。」

「うん。」

.....

.....

夜も更けた頃、銀古は深い眠りから徐々に意識を取り戻した。

「昼間に寝すぎたせいか、夜は眠れなくなったな。」そう思い、布団の中で体を伸ばし、起き上がって蟲煙を一本点けようと箱のそばへ行った。そのとき、隣の部屋からかすかな物音が聞こえてきた.....

「.....あ.....バカ平.....こんな時間に.....まだするのか？ だめだよ.....すぐ隣で寝てるのに.....起こしたら.....どう説明するんだ？ それに.....銀古さんが.....すぐ隣にいるのに.....もう少し我慢して、銀古さんが去ってから.....待って——あ.....ん.....」

「この声.....向かいの部屋からだ.....孝忠の声だ。はっきり聞こえないけど.....まさか、彼ら.....いや、そんなはずは.....」銀古は必死に違う方向へ考えを逸らそうとした。

向かいの部屋は一時、静かになった。

「やっぱり聞き間違いか？」銀古は平静を装い、慎重に箱の引き出しを開け、  
蟲煙を取り出して火をつけ、一服吸った。

口から吐き出した白い煙がまだ消えぬうちに、再び向かいの部屋から平治の声  
が漏れてきた。

「……口ではそう言ってるけど……もうカチカチに……体は……正直だ  
な……」

断片的にしか聞こえない言葉だったが、銀古はもう確信していた。向かいの部  
屋で今、孝忠と平治が何をしているのか。気がつけば銀古は壁際に立ち、耳を  
澄ませて隣室の気配を盗み聞きしていた。

「あ……ん……はぁ……」

銀古の耳に届くのは、二人の低く抑えた喘ぎ声だった。そして銀古は、自分自  
身の股間が、二人の幸福そうな吐息に呼応するように、ゆっくりと硬く勃起し  
ていくのを感じていた。壁に寄りかかりながら、銀古は服の上から自分の股間  
を撫で、揉みしだいた。今の状況では、壁越しに聞こえる二人の声だけではも

う満足できない。「……一度、見てみたい。」そんな思いが、銀古の脳裏に浮かんだ。

「哨蛊を使うか……？　ここは海から遠い。口笛を吹いても無駄だ。哨蛊を呼び寄せることもできない。こんなことに哨蛊を使うなんて……だめだろう。仮に呼び寄せられたとしても、哨蛊は群れをなしてやってくる。命にかかわるかもしれない。それに……」　銀古の箱には、哨蛊を呼び出すための口笛が収められた引き出しがある。その中には一匹の哨蛊が住み着いている。いつ潜り込んだのか、銀古自身も知らない。おそらく旅の途中で海辺を通った際、こっそり入り込んだのだろう。「だが、もしあの哨蛊を使ったとして、壁に開いた穴をどうやって孝忠や平治に説明する？　……やはりやめよう。哨蛊に対して、そんなことに使ってしまったら申し訳ない気がする。ならば……」

欲望に支配された銀古の頭は、次の一手を思いついた。「哨蛊が使えないなら、いっそ自分の部屋を出て、隣の部屋の扉の前で覗いてしまおう。」

銀古は忍び足で自分の部屋の扉まで進み、慎重に開けた。続いて隣の部屋の前まで移動し、畳の上に膝をついて座った。揺らめく薄暗い燭台の光が、扉の薄紙を通して銀古の顔に淡く映る。ここなら、平治と孝忠の会話も喘ぎ声も、よりはっきりと聞こえてくる。銀古は深く蟲煙を吸い込み、吐き出した後、そっ

と木の引き戸を引いて細い隙間を作った。両腕で体を支え、翠色の瞳を門隙に押し当て、室内の光景を覗き込んだ……

揺らめく燭火の傍らで、孝忠と平治は布団の中で互いの肉棒を咥え合っていた。彼らの布団の脇には屏風が立てられ、その向こう側ではおそらく良吉が眠っているのだろう。

平治は孝忠の上に覆い被さり、頭と足を逆にした六九の体勢。布団は二人の真ん中を覆うように掛けられ、寒さのため寝間着と二本指の足袋はまだ身に着けたままだった。ただ腰紐を解いただけなので、肌と肌が密着し、今のような交わりが可能になっていた。

「ん……あ、平治……もう出そう、出る——」 孝忠は口から平治の太い肉棒を引き抜き、喘ぎながら言った。

「そのまま……俺の口の中に射ってくれ……」 平治はそう言いながら、さらに強く吸い付き、手のひらで孝忠の陰茎を高速で扱き上げた。

「あ、ああーん、出る、出ちゃう！ 射る——！」 孝忠は自分の口を手で覆い、呻き、喘ぎ、震えながら、腰を強く突き上げ、濃厚な精液を平治の口腔へと次々と放った。平治は一滴もこぼさず受け止め、すべてを飲み干した。

.....

扉の外の銀古は、いつの間にか衣帯を解き、陰茎を手握って弄んでいた。前立腺液が透明に滲み出し、右手の掌を濡らしていた。

.....

「どうだ？ 気持ちよかったか。」 平治は体を返し、孝忠と同じ向きに横たわり、彼を抱き寄せた。

「うん.....うん。」 孝忠は恥ずかしそうに平治の胸の中で頷いた。

「だろ？ 半月も溜め込んでたんだから、放出しないと体が壊れる.....でも俺はまだ射ってないぞ。どうする？」 平治は笑った。

「じゃあ.....俺もお前を口で出してやるよ。」

「え？」

「挿れたいなら.....俺、まだ洗ってないから汚いぞ。やめとけ。口で出すのも同じだろ。そもそもお前が先に言わなかったせいだ。」

「はは、銀古さんがいるから、タイミングが計れなくてな.....じゃあ、お前が挿れてくれよ。」

「え？ 本気か？」

「本気だ。もう準備してある。中はきれいに洗ってある。」

「.....で、でも.....」

「孝忠が最近何を心配してるか、分かってるよ。お前が良吉を産んでから、もう五年経つ。山口先生の言う通り、山主の寿命が尽きかけたときにだけ、蟲に取り憑かれた男たちが妊娠する現象が起きる.....でもこの五年間、何度も交わったのに、俺たち二人とも妊娠の兆候はない。」

.....

「なるほど.....平治も蟲に取り憑かれていたのか.....」 銀古は心の中で思った。

.....

「.....だからこそ、もう五年経った。山口先生は、男たちが散発的に妊娠し始めたら、それが山主の寿命が尽きる前兆だと言っていた。今なら、妊娠する確率がかなり上がっているかもしれない。」

「それがどうしたって.....」 平治は体を起こし、射精後疲弊した孝忠の陰茎を握って扱き始めた。そして再び口に含み、吸い付いた。

「待っ……」

体の反応は正直だった。孝忠が何か言う間もなく、平治のフェラチオの快楽に沈み、射精後萎えていた陰茎が、平治の温かく湿った口腔と巧みな舌の愛撫で、再び充血し硬くなった。

「ほら、また硬くなった……俺は思うんだ。子どもは天からの贈り物だって。自然のままじゃ俺たちは子孫を残せない。この山に定住して、お前に会って、子どもを授かった。本当に幸せだと思ってる。」

「でも……妊娠は本当に……辛いんだ。腹の中で命が育っていく喜びはあるけど、妊娠がもたらす苦しみの方が、はるかに大きい……平治にもそんな苦しみを味わわせたくない。」

「孝忠は本当に優しいな。」平治は孝忠の陰茎を扱き続けながら言った。「お前が良吉を妊娠してから出産するまで、ずっとそばにいたから、俺はその苦しみをよく知ってる。お前は食事が喉を通らず、つわりで苦しみ、便秘のときは俺が浣腸して、手で便をかき出してやった。胎児が大きくなるにつれ、お前はどんどん痩せていった……出産のとき、男には産道がないから帝王切開だった。あの激痛……薄い腹の皮の下で良吉が暴れ、早く出てこようと暴れる



姿.....もう少し遅れたら腹を破って出てきそうだった.....幸い山口先生を事  
前に呼んでおいて、すぐに手術できた。あの血まみれの光景は、一生忘れられ  
ない.....」

「だから.....お前にそんな思いはさせたくない.....」

「でも性欲ってのは、来たら止められないものだ.....だから、これからは俺た  
ちが変わるときは、全部お前がここに挿れてくれ.....」 平治は孝忠の腰のあ  
たりにしゃがみ込み、孝忠の陰茎を自分の後孔に当て、ゆっくりと腰を沈め  
た.....「次の山主が生まれるまで.....」

「あ.....す、すごい.....平治の中、温かくて、きつい.....」 孝忠は言葉を発  
さなかったが、顔に浮かぶ表情が、今の心境を雄弁に語っていた。

「ほら、孝忠も気持ちいいだろ。これからはしっかり楽しんでくれ。」 そう  
言いながら、平治は腰を振り始めた.....

.....

「確かに、性欲はほとんどの人間が抗えないものだ。抗えないなら、いっそ楽  
しむしかない.....でも不思議だな。妊娠を望まないなら、なぜ避妊しない？ 動  
物の腸でコンドームを作るなり.....また新たな疑問が増えた.....」 銀古は目

を大きく見開き、平治が孝忠の股間に跨がり、激しく腰を振る姿を凝視していた。さっきの疑問を考える余裕はなく、ただ股間の陰茎を高速で扱き、部屋の中から聞こえる喘ぎと呻き、そして二人の体がぶつかり合う音が、ますます激しくなるのに合わせ……

「平治、もうそろそろだ……あ、ん……出る、出ちゃう——」

「早く、俺に……孝忠が俺に種を蒔いてくれる……中に出して、俺の淫らな穴に……あ、熱い……俺も——溢れる——」

平治の淫語と激しい腰使いに煽られ、孝忠は再び絶頂に達し、熱い精液を深く夫の後孔に注ぎ込んだ。同時に、平治も前立腺を孝忠の陰茎に擦られ、射精した。青筋の浮いた太い陰茎が上下に震え、高潮のたびに先端が強く上を向き、乳白色の精液が馬眼から勢いよく噴き出した。平治の精液は孝忠の上半身を覆い、温かかった精液はすぐに冷え、孝忠は上半身がひんやりとするのを感じた……

扉の外の銀古は、室内のすべてを目に焼き付け、陰茎を激しく扱いていた。絶頂が近づいた瞬間、左手で亀頭の前に受け皿を作り、馬眼から噴き出す濃厚な精液を掬った。旅の途中で長く溜め込まれていた精液が一気に解放され、左手

では受け止めきれず、数滴が床に滴り落ちた……「どうしよう……手がべったりだ……」

銀古は自分がこんな行為に及んだことに驚き、気がつく口の中は自分の精液で満たされていた。精液特有の生臭い匂いが鼻腔を抜け、口の中は熱く、滑り、まるで一掬いの痰のような感触……「今となっては、これが一番いい方法か。」

銀古はごくりと喉を鳴らし、口の中の濃精を飲み込んだ。「床に落ちたのは、服で拭けばいい……」 銀古は門隙から差し込む薄暗い光を頼りに、床に落ちた数滴の精液を拭き取った。片付けを終え、扉を閉めて立ち去ろうとしたそのとき、室内から再び声がした……

川猿平治はまだ物足りなさそうに言った。「もう一回……」

平治は再び腰を回し、円を描くように振り始めた。孝忠の陰茎は彼の直腸壁にきつく締め付けられ、擦られ……

「あ？ もう無理だって……」

「どうして無理なんだよ、まだお前のチンポが俺の中でカチカチに突き刺さってるの、感じてるだろ……ほら、俺のもまだ元気いっぱいだぞ。」 平治は自分の依然として硬く勃起した陰茎を握り、上下に振って孝忠に見せつけ、根元

から尿道に残った精液を絞り出した。そして体を屈め、孝忠の上半身に広がった液状化した自分の精液を舐め取り始めた。乳首からへそまで、孝忠の上半身のあらゆる肌を、平治は一寸も残さず舌で這わせた……

ついに孝忠は、平治の執拗な愛撫に耐えきれなくなり、体を起こして跨がる平治を抱き寄せ、激しく口づけを交わした。舌先が互いの温かく湿った口腔の中で絡み合い、二人の頬は紅潮し、息遣いも重く、急促になっていた……

扉前の銀古は、室内で繰り広げられる光景をなおも覗き続けていた。いつの間にか股間の巨根が再び硬く勃起し、尿道に残った精液を押し出し、透明な先走りが馬眼から滲み出し、赤く膨らんだ亀頭の下で今にも滴り落ちそうになっていた……ついに銀古は、再び自分の陰茎を扱き始めた……

部屋の中では、二人が熱い口づけを終え、川猿孝忠は夫の平治を仰向けに寝かせ、両脚の足首を掴み、前後に腰を振り、自分の陰茎を平治の体内で激しく、力強く抽挿し始めた……

「いい……最高だ、あ、あ——あはっ、こうでなくちゃ……孝忠、孝忠に突かれて俺、すごく気持ちいい、あ——早く、早くまた夫の俺に種を蒔いてくれ……」

「あ、そんなこと言うな、恥ずかしい……声、大きすぎる——」

銀古は頬を紅潮させ、口の中が渴き、左手で自分の荒い息を覆い、食指を軽く噛んで鼻だけで呼吸するよう努めた。あまり大きな音を立てて、夫婦二人に気づかれるのを恐れて……

……

「平治パパ……」

屏風の向こう側から、良吉の声が聞こえた。三人とも——銀古を含めて——驚き、身を硬直させたまま動けなくなった……

「……あ？ どうした、息子？」 平治は心を落ち着かせ、静かに言った。

「しっ——夢遊病みたいだぞ。なんで返事するんだ？」 孝忠は眉をひそめ、平治の耳元で囁いた。

「平治パパ……やめて……あ〜」 良吉のあくび声に混じって、言葉が漏れた。

「孝忠パパをいじめちゃだめ……」

「ぷっ……」 孝忠は思わず吹き出した。

「は？　なんで俺が孝忠をいじめてる前提なんだ？　どう見ても今は孝忠がお前をいじめてるだろ……」　平治は小さな声で不満を漏らした。

「やっぱり夢言だよ。」　孝忠は屏風を覗き、向こう側の良吉がまだ深く眠っているのを確認した……「いい子だ。ただの寝言だよ。もう三十近いのに、まだ子どもみたいだな。誰がいじめてるかなんて……そんなのどうでもいいだろ。」　孝忠は腰を屈め、両手で平治の頬を包み、耳元で囁いた。

平治は顔を赤らめ、目を逸らしながら言った。「ふん……そういうことは分かっている。ただ、良吉がお前とすごく仲がいいのが……普段からずっとお前を守って、お前を独り占めしてて、俺も……」

「はは、誰に嫉妬してるんだか。今はお前が俺を独占してるじゃないか……良吉もいずれ大きくなって、家には俺たち二人だけになる。老い先短い頃になっても、今みたいに俺を大事にしてくれるのか？」

「もちろん。」

「え？　そんなに即答されても信じられないよ。」

「じゃ、じゃあどうしたら信じるんだ？」

「たぶん、最後までそばにいてくれるなら……そのとき信じるよ……」

「もし、俺がお前より先に逝ったら？」

「え？ そうなったら、新しいおじいさんを探して、残りの人生と一緒に過ごすさ。」

「はは、ほんとに薄情な奴だな。それじゃ俺は百まで生きなきゃ。お前の企みを成功させない。」

「それが一番いい……続ける？ それとも寝る？」

「もちろん続ける。」

「じゃ……声は抑えて、恥ずかしい言葉も禁止な。」

「うん、了解。」

川猿孝忠は体を屈めて平治に口づけをし、同時に腰を振り続けた。孝忠の巨根が平治の後孔の奥深くまで突き刺さるたび、平治は低く喘いだ……「ん……ん……あは……ん……」

孝忠は口づけを止め、平治の耳朶や首筋を舐め、吸い、腰の動きをさらに速めた。孝忠自身の喘ぎと呻きも、ますます重くなった。



「あ……ん——ふっ、しゅ……ん……」

「ん……孝忠、もうイキそうか？」 平治が喘ぎながら尋ねた。

「うん、また射ちそう……」

「射て、ん……俺の淫らな穴に、射って……あ……」

「やめろ……そんな恥ずかしい言葉、禁止だって言っただろ。」

「でも……お前、どんどん激しく、速く突いてくる……ほら、お前だって俺の淫語、聞きたがってるだろ……」

「バカ平治……」

「お前も……お前も言ってくれよ。俺、孝忠の淫語が聞きたい……普段の孝忠は真面目すぎて、きっとストレス溜まってるだろ……正直に言えば、お前が俺を寝かせて、自分から挿れてきたとき……また一回、お前に惚れ直した。初めて出会ったときみたいに……普段溜め込んだストレス、今吐き出さないでいつ出すんだ？ たとえ普段の孝忠とは違う姿でも、俺はお前を愛してる。だから、本当の自分を解放するのを怖がらないで……俺だって……普段と、ベッドでするときの俺、違うだろ。お前、嫌いじゃないよな？」

「俺……俺……好きだ。」

「だから……俺も違うお前が見たい……」

「あ、俺、がんばる……もう、すぐ、出る、出そう！」

「じゃあ、俺が手伝ってやるよ……」 川猿平治は孝忠の耳元で囁き、後孔を強く締めつけ、孝忠の激しい抽挿を阻んだ。「孝忠……射ちたいか？」

「射ちたい、射ちたい、射ちたい……」

「あ……孝忠は誰に射ちたいの？」

「孝忠、孝忠は平治夫に……平治、こんなに締めちゃだめ、入れられない……」

「そうだよ、孝忠のチンポは大きいから、俺が尻を締めたなら入れにくくなる……孝忠は俺の淫らな穴を緩めてほしい？」

「ほしい、ほしい……孝忠を入れて……孝忠を平治夫の淫らな穴に挿れさせて！」

「いいぞ……でもまだ足りない、まだ足りないよ孝忠。もっと、もっと言い続けて！ 言い続けないとご褒美はないぞ……」

「入れて……孝忠の大きなチンポを、平治夫の濡れて温かい淫らな穴に挿れさせて、孝忠、もう、もう我慢できない……孝忠の種を平治の中に射ち込んで、平治夫に種を蒔かせて、孝忠が平治夫に種を蒔く！ 孝忠は平治夫に種を蒔きたい——！」

「あ……あ……あ——」 夫・川猿孝忠が本音を解放したのを聞き、平治は後孔の力を緩め、孝忠の巨根が狂ったように後庭の奥を突き上げるのを許した。

「——なんて心地よい声だ！」

「あ……あ——ん……はぁは——出る、出る、種が孝忠のチンポから出る、孝忠、孝忠が平治夫に種を蒔く、啊……あはあ——出た、出た、射った——！」  
川猿孝忠は体を倒し、平治の首筋を噛んだ。

「いい、いい……いいぞ、すごくいい……あ……あ——んはあ……感じる——  
孝忠の種が俺の淫らな穴の奥に射ち込まれた、孝忠に播種された、平治、すごく嬉しい……体の中が熱い、熱い……俺も、もうすぐ射ちそう、止めるな、孝忠、止めるな——」

「ん——ん……」